

雲間星の表現 —— 『建礼門院右京大夫集』二五二番歌試論 ——

松田健見

一 問題提起

星がまだ歌の景物として定着していなかった文治期¹⁾、旅先で出会った星空に「あはれ」を見出した歌が、歌人・建礼門院右京大夫（以後「右京大夫」と表記する）により詠まれる。

十二月ついたちごろなりしやらん、夜に入りて、雨とも雪ともなくうち散りて、むら雲さわがしく、ひとへに曇りはてぬものから、むらむら星うち消えしたり。ひきかづきふしたる衣を、ふけぬるほど、丑二ばかりにやと思ふほどに、引きのけて、空を見上げたれば、ことに晴れて、浅葱色なるに、光ごととしき星のおほきなる、むらなく出でたる、なのめならずおもしろくて、花の紙に、箔をうち散らしたるによう似たり。こよひはじめて見そめたる心ちす。さきさきも星月夜見なれたることなれど、これはをりからにや、ことなる心ちするにつけても、ただ物のみおほゆ

月をこそ ながめなれしか 星の夜の 深きあはれを こよひ知りぬる
〔建礼門院右京大夫集〕二五二

中で、不安定な天候の中、雲の複雑な動きに伴い星が見え隠れする様子を記述した詞書「夜に入りて、雨とも雪ともなくうち散りて、むら雲さわがしく、ひとへに曇りはてぬものから、むらむら星うち消えしたり」は、

- ・ 遮蔽物を通して見た微光の散在
- ・ 遮蔽物が動くことで見え隠れをくり返す光の動態
- ・ 雨などが降る中で見える天象の光の様態

の三点について、「むらむら」などの表現を通し詳細に写真したところに特徴がある。

この詞書は、鎌倉後期から南北朝期に活動し、星を景物として取り入れた京極派歌人の歌への撰取が指摘されてきた。²⁾

むらむらに 雲のわかるる 絶え間より 眺しるき 星出でにけり

〔玉葉和歌集〕雑二・三十首歌めされし時に、眺雲を・二一三八・京極為子

見るままに あまぎる星ぞ うきしづむ 眺やみの むら雲の空

〔文保百首〕雑・五九〇、『風雅和歌集』雑中・文保三年百首歌の中に・一六二四・西園寺実兼

例えば、為子歌は「むらむら」を使い、星の出現を雲の複雑な動きを通し表現した点で、実兼歌は群雲の中、疎らとなった星の微細な動態を表現した点で、前掲した詞書の記述と共通する。又、詞書の特徴として前掲した三点の発想は、

夕暮の 雲にほのめく 三日月の はつかなるより 秋ぞ悲しき
（『風雅和歌集』秋上・秋歌とて・四五一・西園寺公宗）
むら雲に かくれあらはれ 行く月の 晴れもくもりも 秋ぞ悲しき

（『永福門院百番自歌合』三十八番右・七六、『風雅和歌集』秋中・題しらず・六〇四）

風のもの 霰一しきり 降りすぎて また村雲に 月ぞもりくる

（『為兼家歌合』冬夜・二十三番左・四四、『玉葉和歌集』冬・冬歌の中に・一〇〇五・京極為子）

などに見られる、「素材としての光彩の時々刻々の微妙な陰影を捉え、それを表出する」京極派叙景歌の特徴と共通する。右京大夫歌が『玉葉和歌集』に入集しており、右京大夫が京極派歌人に積極的に受容されてきた歌人であることも考えると、右京大夫歌が、京極派歌人の星の歌を考えるに当たり重要な歌であることは首肯出来る。

一方、右京大夫歌の表現を、右京大夫が生きた院政期から鎌倉前期の歌人たちの歌の表現と照合・比較する試みは進んでいない。院政期から、前代までの類型に捉われない表現が、主に題詠を通して歌に見られるようになった。例えば、京極派叙景歌の特徴として前掲した光線の様態・動態に対する注目も、実は院政期以

後に歌人たちに共有され、京極派に至り結実したものであることが、中川博夫氏の、「間」・「三日月」に関する考察を通し指摘されている。右京大夫歌も、そうした転換期となる時期に詠まれた歌であり、その表現史の中で特質を論じることが出来るのではないか。そして、右京大夫歌が表現史にどう位置付けられるかは、京極派歌人の星の歌の特徴、並びに右京大夫歌からの摂取を論じるに当たり、前提として把握すべき問題だと稿者は考えている。

そこで本論では、右京大夫歌詞書「夜に入りて、雨とも雪ともなくうち散りて、むら雲さわがしく、ひとへに曇りはてぬものから、むらむら星うち消えしたり」をどう表現史に位置付けることが出来るか、詞書の特徴として前掲した三点について院政期以後に詠まれた歌に注目しながら、考察していきたい。

二 微光の散在に関する表現

本節では、遮蔽物を通して見た微光の散在について、院政期以後どのような表現が見られたか、考察する。

院政期には、

夕月夜 ともしき影と 見る人の 心はそらに あくがらし
けり

（『元永二年内大臣家歌合』暮月・一番右・二四・源兼昌）
さらぬだに かすかに見ゆる 三日月を 夕霧しばし 立ち
なへだてそ

（『元永二年内大臣家歌合』暮月・八番左・三七・藤原季通）

と、夕月・三日月などの薄く光る月が景物として積極的に取り入れられるようになるが、それらの光を、遮蔽物を通してさらに細分化して表現した歌も詠まれる。

風吹けば 枝やすからぬ 木の間より ほのめく秋の 夕月
夜かな

〔元永二年内大臣家歌合〕暮月・三番右・二八、『金葉和歌集』秋・撰政左大臣の家にて夕月夜の心をよませ侍りけるに
よめる・一七五・藤原忠隆)

影うすみ 松のたえまを もりきつつ 心細しや 三日月の
空

〔山家集〕雑・松の絶え間より、わづかに月のかけろひで見
えけるを見て・一一五一)

木の間もる かきねにうすき 三日月の 影あらはるる 夕
がほの花

〔拾遺愚草〕春日同詠百首応製和歌・夏・二三三三)

まず忠隆歌では、「風吹けば 枝やすからぬ」と、風により絶えず揺れる枝に遮られ、ちらちら明滅する夕月の薄い光が表現されている。そうした不安定な光が「ほのめく秋の 夕月夜かな」と、秋の景趣を引き出す存在として捉えられている。一方、西行歌は、三日月が枝に遮られ微かに光を弱めるのを見た実詠である。これらの歌からは、散在する微光に対する関心が、院政期の時点で既に共有されていたことが分かる。

さらに、鎌倉期の作例である定家歌では、枝で細分化された「うすき」三日月の光が白い夕顔を照らす、微かな色彩の変化が捉えられている。単に微光に関心を向けるだけでなく、光彩・色

彩のわずかな変化を正確に捉える視点も、この時点で形成されていたことが分かるのである。

又、中川博夫氏は、長治二(一一〇五)年ごろ奏覧され、組題百首の先駆となった『堀河百首』以後、空間上の「間」について「物の間隙からもれる光や光彩の見立ての情趣」が積極的に実践されたと述べる⁸⁾。続けて、そうした見立てに関わる歌を概観する。まず、夏、鹿狩で焚く「照射」という篝火を雲間の星に、螢を葦間を漕ぐ舟の篝火に見立てた歌を掲出する。

五月間 さ山が峰に ともす火は 雲のたえまの 星かどぞ
見る

〔堀河百首〕夏・照射・四一一、『千載和歌集』夏・(同じ御時、百首歌たてまつりける時、照射の心をよみ侍ける)・一

九五・藤原顕季)

五月間 雲間の星と 見えつるは 鹿たづね入る ともしな

りけり (『堀河百首』夏・照射・四三〇・肥後)

難波江の 草葉にすだく 螢をば あし間の舟の かがりと

や見ん (『堀河百首』夏・螢・四六五・藤原公実)

(※「見立てられる景物(実景)」に傍線、「見立てる景物」に二重線を付す)

顕季歌は、闇に焚かれる篝火を、光が点々と集中していることから「雲のたえまの星」に見立て、肥後歌は、最初「雲間の星」と見ていた光が、動いたことで、実は「照射」だったと気付いた驚きを「なりけり」を使い表現している。公実歌は、草々に集まる螢の光を、草の隙間から光が見え隠れしていたためか、まるで「葦」の「間」を分けて進む「舟のかがり」だと見ている。螢に

関しては同時期に、

五月闇 あしまの螢 ほのほのと 見ゆるやよどの わたり
なるらん (『雅兼集』遠水螢・一五)
という、葦間に見える螢の光を「ほのほの」と表現した例もあり、
注目される。

篝火を星に、螢を篝火に見立てる発想は、前代から試みられてきたものである。しかしこれらの歌は、そうした見立ての取り合わせを活用しつつ、間隙から洩れる光に見立てることで、暗闇に光が散在する景を表現した点に特徴がある。これも、光の散在に注目する視点が、院政期に形成されたことの論拠となる。

別の例を挙げる。

しもつやみ 光ともしき 木の間より もる月かけと 見ゆる卯の花 (『山家五番歌合』卯花・三番左・五・藤原道経)

むらさきの 雲間の星と 見ゆるかな うつろひのこる 白

菊の花 (『清輔集』冬・菊花纒残・一八九)

卯花を月に、菊を星に見立てるのは、前代から試みられてきた発想であるが、道経歌では、枝を通し疎らになった月光に見立て、ぼつぼつと卯花が咲く景を、清輔歌では、雲間に点在する星に見立て、周囲の菊が紫に移ろう中で白く咲き続ける「菊花纒残」の景趣を表現した点に、特徴を見出すことが出来る。

三 光の複雑な動態に関する表現

本節では、遮蔽物が動くことで見え隠れする光の動態について、院政期以後どのような表現が見られたか、考察する。

院政期には、月と雲の関係性に対し歌人たちの関心が向けられるようになり、

むら雲の 絶え間よりづる たびごとに めづらしくなる
月の影かな

(『為忠家後度百首』秋・雲間月・三九六・作者未詳)

ひたすらに いとひもはてじ 群雲の 晴れ間ぞ月は てり
まさりける (『清輔集』秋・月三十五首の中に・一五九)

と、本来厭われる存在の雲が却って晴れ間の月を明るく引き立たせる、という認識が共有される。この背景には、

山のはを 横ぎる雲の 絶え間より 待ち出づる月の めづらしきかな (『堀河百首』秋・月・七八五・藤原公実)

秋風に ただよふ雲の 絶え間より もれ出づる月の 影のさやけさ

(『久安百首』秋・三三八、『新古今和歌集』秋上・崇徳院に百首歌たてまつりけるに・四一三(第二句「たなびく雲の」・藤原顕輔)

など、雲の動きに伴い月光が射してくる様子を詠んだ、同時代の歌との連環が考えられ、結果、

なかなか ときどき雲の かかるこそ 月をもてなす
ざりなりけれ

(『山家集』秋・(月歌あまたよみけるに)・三六一)

いとほじよ 月にたなびく 浮雲も 秋の気色は 空に見え
けり (『拾遺愚草』二見浦百首・秋・二三八)

と、雲が往来する月夜に対する関心に接続する。この表現史の中で、雲の激しい動きに伴う月光の変化を表現する試みが、特に

「雲間月」題が設定された、保延元（一一三五）年ごろ成立の『為忠家後度百首』以後、見られるようになった。

さだめなく ただよふ空の うき雲に 見え隠れする 秋の

夜の月（『為忠家後度百首』 秋・雲間月・三九二・作者未詳）

雲を出でて 雲にまた入る 月影や 降れば消えぬる には

の白雪 （『惟宗広言集』 秋・雲間明月歌合・四七）

さだめなき 雲の絶間の 月影は 消えて又ふる 雪かとぞ

見る （『二条院讃岐集』 雲まのつき・四五）

『為忠家後度百首』三九二番歌は、浮雲の「さだめなく ただよふ」動きに伴い月が「見え隠れする」と平明に表現しており、

一方の広言歌・讃岐歌は、月の雲への出没を「雲を出でて 雲にまた入る」「さだめなき」と写実し、その光を降つては消える

「雪」に見立てることで、光の複雑な変化を表現している。

風ふけば むらだつ雲の 波のうへに ながるる月は 見え

み見えずみ

（『為忠家後度百首』 秋・雲間月・三九四・作者未詳）

夜もすがら たえまたえまぞ 待たれける 雲より雲に う

つる月をば （『頼政集』 秋・雲間月・二二六）

白雲に たえだえまじり ゆく月の 未ふきはらへ よもの

秋風 （『玉吟集』 秋・月歌として・二四五三）

本来、月は穏やかに光を放つ景物であるが、雲が月の傍を速く走ると、月も雲の反対側の方向へ動いていくように見える。そうした月の相対的な動きも、雲と月が交錯する複雑な景に関わる表現として試みられる。中で、『為忠家後度百首』三九四番歌は、雲が群がる様を「むらだつ」と記述し、さらに、雲を波に、月を

舟に見立て、月面を雲が通過し月が隠れたり現れたりする様を「ながるる」、即ち、月が雲に流されているように見ると表現しており、注目される。

又、右の三首は「見えみ見えずみ」「たえまたえま」「雲より雲に」「たえだえ」といったくり返し表現を使い、雲の動き・雲の隙間を縫って進む月の動きをリズムミカルに記述した点も特徴として挙げられる。

四 雨などが降る中で見える天象の光の表現

本節では、雨などが降る中で見える天象の光について、院政期以後どのような表現が見られたか、考察する。

雨が降る中で見える月を詠んだ歌は、院政期から、

しぐれゆく 雲にはづれて てる月は ひとつそらとも お

ぼえざりけり （『出観集』 冬・冬月・五六〇）

晴るるか 見ればほどなく 時雨れつつ 影さだまらぬ

夜半の月かな

（『月詣和歌集』 十月・月前時雨といふことをよめる・九〇〇・平経正）

など、雲間の月が歌に詠まれるのに伴い散見される。特に鎌倉期には、

月をなほ 待つらんものか 村雨の 晴れ行く雲の 末の里人

（『仙洞句題五十首』 雨後月・一三六、『新古今和歌集』 秋上・雨後月・四二三・後鳥羽院宮内卿）

晴れ曇る 影を都に 先立てて しぐると告ぐる 山の端の月

〔千五百番歌合〕冬一・八百五十四番左・一七〇六、『新古今和歌集』冬・題しらず・五九八・源具親

と、月光の変化と雨の関係に対する関心が歌人たちに共有される。その表現史の中、どのような歌が詠まれたか、見てみたい。

かくれぬと 見ればたえまに 影もりて 月もしぐるる むら雲の空（『正治二年院初度百首』冬・三六一・守覚法親王）冬くれば 時雨るる空の 村雲に 月のすがたの 見え隠れする

〔玉吟集〕冬・（古今一句をこめて、冬の歌よみ侍りしに）・二五四五

まず守覚法親王歌は、「かくれぬと 見ればたえまに 影もりて」と雲に隠れたかと思えばまた姿を見せた月光を写実し、その様子を、降ったり止んだりをくり返す時雨に重ね「月もしぐるる」と表現している。上句で天候の複雑な変化を写実する構造は、前掲した経正歌と共通する。

家隆歌は、時雨を降らせる群雲に月が「見え隠れする」景が詠まれている。上句で雲の様態を写実し、下句で月が「見え隠れする」と表現する構造は、前節に挙げた『為忠家後度百首』三九二番歌と共通する。

これらの歌からは、院政期に試みられた複雑な天候を描出する表現を鎌倉期の歌人が素地として撰取する、表現史の連続を見ることが出来る。そして歌人たちは、前代の表現を撰取した上で、さらに試行を重ねていく。

ふきみだる 雪の雲間を 行く月の あまぎる風に 光そへ

つつ 九）〔拾遺愚草〕建仁元年十二月八日八幡歌合・月前雪・二四四

山かぜに 時雨やとほく 成りぬらん 雲にたまらぬ 有明の月（『承久元年内裏百首歌合』冬夜月・一七三・順徳院）定家歌は、雪が「ふきみだる」様子から、風の強さ・風に吹かれる雲の往来・月の相対的な動きの激しさを想起させ、「あまぎる風に 光そへつつ」により、雲間から洩れた月光が降る雪をちらちらと照らす、幻想的な景を表現している。

順徳院歌は、時雨が止み、雲間から月が出る様を「雲にたまらぬ」と、まるで雲から光がこぼれ落ちたかのように表現している。「雲にたまらぬ 有明の月」は、判詞（衆議判）で「ことにめづらしくいできて侍る秀逸なりと各申す」と評され、複雑な天候での月光をどう表現するかに対する、歌人たちの関心を見ることが出来る。

たえだえに 里わく月の 光かな 時雨を送る 夜半の村雲
〔老若五十首歌合〕冬・百六十五番左・三二九、『新古今和歌集』冬・五十首歌奉りし時・五九九・寂蓮法師

たえだえに 月より過ぐる 群雲の 雨うちすさむ 萩の上風

〔千五百番歌合〕秋二・六百十四番左・一二二六・源具親）
たえだえに 雲間を分けて ゆく月の ゆくへにまよふ 秋のむらさめ

〔明日香井和歌集〕建仁二年八月廿五日百首・秋・三三九

鎌倉期には、複雑な天候で月を詠むに当たり、景物の散在を意味する語「たえだえ」が頻用される。その使用例を見ると、寂蓮歌では雲に隔てられた月があちこち照らしている様（「光の散在」、具親歌では雲がちぎれちぎれに月を過ぎていく様（「雲の動態」、雅経歌では月が雲間をとぎれとぎれに進んでいるように見える様（「月の相対的な動き）」と、様々な表現において「たえだえ」が使用されたことが分かる。

さらに、三日月などの微光について、複雑な天候の中、雲間でのわずかな光の動きを表現した歌も見られる。微細な光に対して、当時の歌人たちがいかなる価値を見出し、表現を当てはめてきたかを知ることが出来る。

みねつづき しぐるる雲の たえまより 夢かほのかに 三日月の影

〔『千五百番歌合』冬一・八百五十二番左・一七八二・藤原保

季）

初雪の ふりすさみたる 雲間より 拝むかひある 三日月の影
〔『拾玉集』賀茂百首・冬・二三六〇）

まず、表現の特徴が見られる歌として、保季歌を挙げる。保季歌では、時雨の中、雲間から見える三日月の光を「夢かほのかに」と表現しており、三日月の光が、雲に隔てられ見えないか見えぬか程の明るさである様を「夢か」から知ることが出来る。判詞（定家）では「夢かほのかになど、ことばのつづきめづらしきさまに侍るべし」と評された。

続けて、意識の特徴が見られる歌として、慈円歌を挙げる。慈円歌では、雪が止み雲間から射す三日月の光を「拝むかひある」

と評している。中川博夫氏はこの語に注目し「微細な三日月の光景に価値を見出したものと言え、新古今時代に京極派の美意識に通う素地が出来していたことを示唆すると言つてよい」と述べた¹⁶⁾。この意識は、薄雲に隔てられた月がほのかに光を変化させる景に価値を見た、

薄雲の ただよふ空の 月影は さやけきよりも あはれなりけり
〔『正治二年院初度百首』秋・三九・後鳥羽院）

などの歌からも見られ、中川氏が述べる通り、夜空に微かに輝く光に注目する、後の京極派歌人に通う意識が、鎌倉前期の歌人に定着していたことが分かる。

そして、鎌倉前期には、複雑な天候の中、雲間に散在する星も歌に詠まれた。

晴れぬるか たちろく雲の たえまより 星見えそむる むらさめの空

〔『千五百番歌合』雑一・千四百十七番左・二八三四・後鳥羽

院宮内卿）

むら雲の たえまたえまに 星見えて しぐれをはらふ 夜の秋風

〔『土御門院御集』承久四年二十首・四季雲・秋・二二五）

宮内卿歌は、雨の中、雲の絶間から見え始める星を見て、「晴れぬるか」と思いを馳せた歌である。暗闇の中で見える微かな光は、天候の変化を知る手がかりとなる。その微光に星を選んだ点にこの歌の特徴がある。又、雲の勢いが衰える様を「たちろく」とする発想はこの歌のみに見られ、動的表現の面でも注目される。土御門院歌は、時雨が止みあちこちで雲が晴れ間を見せる様を

「たえまたえま」と表現している。月は一つの絶間でしか光ることが出来ないが、星はあちこちに散らばった絶間で同時に光を見せることが出来る。そのため、ここでは星が素材になったのだろう。この歌は、家隆から「まさに見様覚候、尤殊勝候歟」と評された。

院政期以後、雲などの間隙を通して見た微光の散在や複雑な天候で変化する光の動きに対し価値が見出され、様々な表現が試行・共有されるようになった。その表現史の流れから、宮内卿歌・土御門院歌など、複雑な天候の中、雲間に見える星を詠んだ歌も捉えることが出来るのである。

なお、宮内卿歌・土御門院歌は『玉葉和歌集』に入集しており、京極派歌人の歌への影響を考えると注目される。

五 「むらむら」考―右京大夫歌詞書の特質―

ここまでの考察から、右京大夫歌の詞書前半に見られる光・遮蔽物に関わる表現は、院政期から鎌倉前期にかけて見られた歌の景趣と共通するものであり、鎌倉前期の時点で雲間の星が歌に取り入れられたことも踏まえると、右京大夫歌詞書もそうした表現史の中に位置付けることが出来る。

では、その星空を表現した歌語に、院政期以後の歌との関連は指摘出来るだろうか。本節ではその点を「むらむら」を取り上げ考察する。「むらむら」は「斑らに」「ところどころ群がって」という意味の歌語で、為子の星の歌に使用されるなど、京極派歌人の歌を考える際にも重要な表現である。

右京大夫歌詞書「むら雲さわがしく、ひとへに曇りはてぬものから、むらむら星うち消えしたり」での「むらむら」は、「星うち消えしたり」に接続する、雲間の星の散在を表現した語である。「うち消えしたり」は「うち消ゆ」が名詞化した「うち消え」に「したり」が接続した表現であり、「あちこち斑らに消え消えする、即ち消えたり光つたりするといふことになるのである」という本位田重美氏の説の通り解釈出来る。即ち、右京大夫歌では「うち消えしたり」を補うことで、光の斑紋だけでなく、雲の複雑な動きに伴い星が見え隠れする、星・雲の動態も「むらむら」で表現させたのである。

この解釈を踏まえ、まず、光に関して「むらむら」と表現した例を見る。

卯の花の むらむらさける かきねをば 雲間の月の 影か
とぞ見る

〔新古今和歌集〕夏・卯花如月といへる心をよみ侍りける・

一八〇・白河院

むらむらに さける垣根の 卯の花は 木の間の月の ここ

ちこそすれ

〔久安百首〕夏・三二一、〔千載和歌集〕夏・卯花をよめる・

一三九・藤原顕輔

卯花が「むらむら」に咲くと表現した例は他にも、

かはのべに むらむらさける 卯の花は せぜの白浪 立つ
かとぞ見る 〔三六条修理大夫集〕卯花処処・五五

がある。詞書の「処処」を表現する語が「むらむら」であり、卯花が「むらむら」に咲くとは、卯花があちこちに群がって咲く様

子を指していることが分かる。

白河院歌・顕輔歌も「むらむら」により、卯花が点々と咲く様子が表現されているが、二首の「むらむら」には、もう一点特徴を見出すことが出来る。中川博夫氏は、顕輔歌に関して「木の間の月」を「むらむら」に咲く垣の卯の花の見立てとし、つまりは「木の間の月」を「むらむら」なるものと見るのである」と指摘、白河院歌でも同様に「雲間の月」が「むらむら」に咲く卯花の見立てとなっている。中川氏はここから「空間の「間」の景を平面的にはあるが光彩の点点とした散らばりに捉えている」と結論付けており、その表現のために「むらむら」がこれらの歌に使われていると論じた。又、鎌倉前期には、

風わたる 籬の竹にもる月は むらむら消ゆる 雪の下草

〔建仁元年十首和歌〕 月前竹風・一一四・藤原信綱

と、見え隠れする月光を「むらむら」消える雪に見立てた歌も見られる。見立てを通し光の斑紋を「むらむら」と表現する方法が、右京大夫歌にも摂取されたと考えられる。

続けて、遮蔽物の動態を「むらむら」と表現した例を見る。まず、院政期の例として、『為忠家後度百首』「雲間月」題の歌を挙げる。

むらむらに 風雲はしる おほぞらは のどけき月も はやく見えけり

〔為忠家後度百首〕 秋・雲間月・三九八・作者未詳

雲の往来に伴う月の相対的な動きを記述した、管見の限り最初の歌である。家永香織氏が「むらむらに 風雲はしる」に関して「風に吹かれた雲が、集まったり散ったり形を変えながら、高

速で流れる様」と論じた通り、この歌の「むらむら」は、雲が絶えず月の近くを走る表現として機能している。さらにこの歌は、天候の動きを把握し「むらむら」などの表現で景を適確に写実している点でも右京大夫歌詞書と共通しており、詞書の記述を考察するに当たり、特に重要な歌であると捉えることが出来る。

又、鎌倉期には、順徳院・宗尊親王の歌から、

薄雲は むらむら白き 大空に さそはれわたる 秋の夜の

月

〔万代和歌集〕 秋下・百首御歌のなかに・一〇一四・順徳院
風に行く 雲のむらむら 行き散りて あはれさえたる 夜
半の月かな

〔柳葉和歌集〕 弘長三年六月二十四日当座百首歌・冬・四〇

〇

と、雲が白くちぎれたり、風に吹かれ散っていく様子が「むらむら」と表現されたことが分かる。雲について「むらむら」と表現し、絶間に天象の光を見る景趣は、院政期以後の歌を通し定着したと考えられ、右京大夫歌の「むらむら」もその表現史に位置付けられるのである。

さらに、光・遮蔽物の動態を一語で重ねて表現する発想も、院政期から鎌倉前期までの表現史を通して捉えることが出来る。

たえだえに うす雲かくれ 星見えて なほ晴れやらす 五月雨の空

〔老若五十首歌合〕 夏・七十六番左・一三二・藤原忠良

にはの海や うらつたひ行く 霧の間に たえだえはるる 有明の月

〔新宮撰歌合〕湖上曉霧・二十二番石・四四・源家長）
前述の通り、「たえだえ」は「むらむら」同様、光の散在・遮蔽物の動態の表現に使用された語であるが、「たえだえ」の一語で光の散在・遮蔽物の動態を重ねて表現した歌も、鎌倉期には確認出来る。

まず忠良歌は、星が雲に見え隠れする五月雨の夜を詠んだ歌であり、「たえだえ」は「うす雲かくれ」にかかり、薄雲がとぎれとぎれに別の雲に隠れていく様子を表現している。一方、薄雲が隠れたことで絶間が出来「星見えて」に続くことから、間接的にとぎれとぎれに出来た絶間から星が見える様子を表現する語としても「たえだえ」は機能している。鎌倉前期の時点で、右京大夫歌と景趣も表現も類似した星の歌が試みられていたことには注目されよう。

家長歌も、奥野陽子氏が「たえだえ」に関して「上からは霧が絶え絶えになる―とぎれとぎれになるという意が響き、下の有明の月との関係からは、有明の月が見えたり見えなかつたりしてとぎれとぎれになる」という意味になる。「月を隠す霧と、霧に隠される月の、受動能動の動的な関係を重ねて表現している」と論じた通り、月と月を隠す霧の様態の双方が「たえだえ」により表現されている。

光の散在・遮蔽物の動態を「むらむら」と表現する発想、光の斑紋・動態と遮蔽物の動態を一語で重ねて表現する発想も、院政期から鎌倉前期までの歌に見られる。右京大夫歌の「むらむら」からそれらの試行を複合的に摂取した表現であると結論付けられ、こうした一見特殊な表現について、実は同時期に試みられた様々

な歌との連環が指摘出来る点に、右京大夫歌詞書の、表現史における特質を見出すことが出来るのである。

六 京極派歌人の星の歌―むすびにかえて―

さて、右京大夫歌からの摂取が指摘されてきた京極派歌人の星の歌も、個々の表現に改めて注目すると、前代の様々な歌からの連環を指摘することが出来る。ここで、冒頭に挙げた二首の歌を再掲する。

むらむらに 雲のわかるる 絶え間より 暁しるき 星出で
にけり

〔玉葉和歌集〕雑二・三十首歌めされし時に、暁雲を・二一
三八・京極為子

見るままに あまぎる星ぞ うきしづむ 暁やみの むら雲
の空

〔文保百首〕雑・五九〇、〔風雅和歌集〕雑中・文保三年百
首歌の中に・一六二四・西園寺実兼

まず為子歌は、往來する雲の絶間から金星が姿を見せる様子が詠まれており、時間の題を「豊富な景物のあでやかなイメージで包み込む」²¹為子の表現方法が現れた歌となっている。従来、雲の動きを「むらむら」で表現した点で右京大夫歌との関係が注目されてきたが、前述の通り、この表現方法は院政期から鎌倉期の歌を通して定着したものと考えられる。京極派歌人の歌には、

むらむらの 雲のたえまを わけすぎて ふけて晴れゆく
夏の夜の月

風立ちて 〔伏見院御集（宮内庁書陵部蔵）〕夏月・一六〇）
でにけり 〔永福門院百番自歌合〕九十一番左・一八一）
月の行く 晴れ間の空は みどりにて むらむら白き 秋の
浮雲

〔風雅和歌集〕秋中・月をよみ侍りける・六〇二・藤原為基
など、夜空の雲の表現として「むらむら」が積極的に使用されて
おり、むしろ、鎌倉期にかけて形成された素地を京極派歌人たちが
が撰取した例として「むらむら」は捉えることが出来る。為子歌
も、その表現史を踏まえ、特質を考察するべきだと考える。

実兼歌は、群雲が覆い星が疎らに見える様子を「あまぎる星」
と記述し、その星が群雲に見え隠れする、微細な光の動態を写実
した歌となっているが、ここで、星が雲に見え隠れする様子を
「うきしづむ」と表現した点が注目される。通常、夜空に「浮く」
と表現される景物は、

はれくもり 星の光ぞ さだまらぬ うきてただよふ むら
雲の空 〔俊光集〕雑・夜雲・五四九

のように「雲」であり、天象の光が「雲」に「浮く」と表現する
例は珍しい。管見の限り、先行例は鎌倉期の関東歌人・宇都宮景
綱の歌のみであり、実兼歌はこの景綱歌から方法を撰取したと考
えられる。

風さわく 空は野分の けしきにて 雲に浮きたる 山の端
の月

〔沙弥蓮瑠集〕二条前相公雅有卿夢想の事ありて、四方月より
はじめて月の百首をすすめられ侍りし時よめる・六二八

外村展子氏が「激しい風に吹かれる、動きの速い雲が波で、月
が舟である」「月が、雲と逆の方向に動くように見える」と述べ
た通り、景綱歌では、月が雲に流されるように見え隠れする様子
が「雲に浮きたる 山の端の月」と表現されている。従って「雲
に浮きたる」は、月の相対的な動きを描出した『為忠家後度百首』
三九四番歌・三九八番歌から続く表現史と接続した表現であり、
実兼歌の「うきしづむ」もこの表現史に位置付けることが出来る
のである。

微光に価値を見出し、光彩の微妙な様態を歌に詠んだ京極派歌
人たちは、景物として星の特徴を把握し、雲がただよう夜空の中
どう見えるか、描出を試みる。この時、右京大夫歌を初めとした
前代の星の歌、さらに院政期以後試みられてきた光・雲の様態に
関する様々な表現も撰取することで、為子歌・実兼歌を初めとし
た秀歌を完成させたのである。

※本文・歌番号の引用は、『風雅和歌集』は石澤一志『風雅和歌
集 校本と研究』（勉誠出版 二〇一五年）、『伏見院御集』は久
保木哲夫ほか『伏見院御集「広沢切」伝本・断簡集成』（笠間書
院 二〇一一年）、『伊勢物語』は鈴木日出男『伊勢物語評解』
（筑摩書房 二〇一三年）、他は『新編国歌大観』（角川書店）に
拠り、適宜表記を改めた。

【注】

（一） 富倉徳次郎「建礼門院右京大夫集評釈 五 大原の歌」
〔国文学 解釈と教材の研究〕二一十二・一九五七年十一月

では、建礼門院の大原入りの時期から、この歌が詠まれたのは文治二（一一八六）年と考察されている。

(2) 為子歌は岩佐美代子『玉葉和歌集全注釈』下（笠間書院一九九七年）・井上宗雄『中世和歌集』（新編日本古典文学大系、小学館 二〇〇〇年）「玉葉和歌集（抄）」、実兼歌は次田香澄・岩佐美代子『風雅和歌集』（中世の文学、三弥井書店 一九七四年）・岩佐美代子『風雅和歌集全注釈』下（笠間書院 二〇〇四年）などで右京大夫歌からの影響が指摘されている。

(3) 鹿目俊彦『風雅和歌集の基礎的研究』（笠間書院 一九八七年）「秋部の構成と歌題Ⅲ 稲妻」から引用。又、『為兼家歌合』二十三番判詞「左歌、句ごとくに心を含みて、景気あらはに、面白く侍るに」の通り、聞くだけで景色を思い浮かべることが出来る、写実的な表現を志向した点も京極派叙景歌の特徴であり、右京大夫歌と共通する。

(4) 雑二・二二五九・詞書「やみなる夜、星の光ことにあざやかにて、はれたる空は花の色なるが、こよひ見そめたる心ちして、いとおもしろくおぼえければ」

(5) 服部喜美子『建礼門院右京大夫集』の本質と『玉葉・風雅集』（『愛知県立女子大学・短期大学紀要』十二・一九六一年十二月）・岩佐美代子『京極派歌人の研究』（笠間書院 一九七四年）参照。

(6) 中川博夫「京極派和歌の一面覚書（2）——（間）の歌の考察」（『徳島大学国語国文学』一〇・一九九七年三月）

(7) 中川博夫「三日月の歌『玉葉集』『風雅集』の美意識」（『国文学 解釈と鑑賞』七二・二〇〇七年五月）

(8) 前掲（6）論文
(9) 例を挙げる。

かへり来る道とほくて、うせにし宮内卿もちよしが家の前来るに、日暮れぬ。やどりの方を見やれば、あまのいさり火多く見ゆるに、かあるじの男よむ。

晴るる夜の 星か河べの 螢かも わがすむ方の あまのたく火か
（『伊勢物語』第八十七段）

(10) 例を挙げる。

難波瀉 いさりするかと 見えつるは あし間とびかふ 螢なりけり（『正暦四年带刀陣歌合』螢・右・一六・作者未詳）

(11) 例を挙げる。

時わかず 月か雪かと 見るまでに 垣根のままに さける 卯の花

（『後撰和歌集』夏・（ともだちのとぶらひまで来ぬことをうらみつかはすとて）・一五五・よみ人も）

(12) 例を挙げる。

久方の 雲の上にて 見る菊は 天つ星とぞ あやまたれける

（『古今和歌集』秋下・寛平御時、菊の花をよませ給ふける・二六九・藤原敏行）

(13) 前掲（7）論文

(14) 雑二・二二八一・詞書「題しらず」・二句「ただよふ雲の」
(15) 冬・八四六・詞書「冬御歌の中に」・五句「庭の松風」

(16) 本位田重美『評註建礼門院右京大夫集全釈』（武蔵野書院 一九五六年）

(17) 前掲(6) 論文

(18) 家永香織『為忠家後度百首全釈』(歌合・定数歌全釈叢書、風間書房 二〇一一年)

(19) 家永氏も、前掲(18) 注釈中で、三九八番歌を「情景を写实的にとらえた叙景歌」と評している。

(20) 奥野陽子『新宮撰歌合全釈』(歌合・定数歌全釈叢書、風間書房 二〇一四年)

(21) 伊藤伸江「京極派和歌の時間表現―『為子集』『親子集』『兼行集』の意識から」(『国語と国文学』七四―九・一九九七年九月) から引用。

(22) 長崎健ほか『沙弥蓮瑜集全釈』(私家集全釈叢書、風間書房 一九九九年)

(23) 月の相対的な動きを写実する発想は、鎌倉期、関東歌人に積極的に実践され、その作例が京極派歌人に注目される、という表現史を辿る。

うき雲は はやくちがひて 行く月の 晴れ間になれば 影ぞしづまる

(『玉葉和歌集』秋下・題しらず・六六〇・冷泉為守)

たえだえの 雲間につたふ 影にこそ 行くとも見ゆれ 秋の夜の月

(『風雅和歌集』秋中・(月をよみ侍りける)・六〇三・北条宗宣)

又、宇都宮景綱が京極派の指導者・京極為兼と親交を持っていた点(『沙弥蓮瑜集』一三七ほか)、月百首を勧進した飛鳥井雅有が、京極派歌人・伏見院に仕えていた点も踏まえると、為

兼・雅有などを通し、京極派歌人が景綱歌を参照していたことは十分考えられる。なお、前掲(22) 注釈「解説」ほか参照。

(まつだ・たける)

千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程二〇一九年修了)